

第3回 村上市総合教育会議 議事録（要約）

1. 日 時：平成28年12月13日（火） 午後1時30分～午後3時15分

2. 場 所：村上市役所 本庁5階 第5会議室

3. 出席者

【構成員】高橋市長、遠藤教育長

大滝教育委員、佐藤教育委員、本岡教育委員、勝間教育委員

【事務局】佐藤総務課長、遠山学校教育課長、田嶋生涯学習課長、山田総務課参事
坂爪指導主事

【傍聴者】3名

【報道機関】0社

4. 欠席者

なし

5. 内 容

【市長あいさつ】

高橋市長：皆さん。改めましてこんにちは。年の瀬も押し迫りまして、非常にお忙しいところお集まりをいただきありがとうございました。今年1年も無事終えるように、また皆様方からのしっかりした目を見ていただければありがたいなと思っています。

県内におきましてもいくつかの自らの命を絶つという事案があり、また、あつてはならないこととは思いますが、教員の不用意な発言によって、当事者に非常に大きなダメージを与えたという事案も発生しているわけでありまして、私も、教育長の方にそのことについてはしっかりと意を用いてというお話を先だつてさせていただいたところでもあります。やはり、その思いがしっかりと現場、最前線にまで伝わっていきませんと、これは何ともしようが無いというふうな思いであります。また、それを取り巻く教員側、学校職員側はもちろんでありますけれど、子供たちがどのような形でそれを受け止め、それをどういうふうな形で、自分の中で解釈をするかと言うところ。これは、子供の能力の中では限りがあると思いますので、先輩であったり目上の者がしっかりとフォローアップしていくということが大切なんだろうというふうに思っております。そういった意味合いから言うと、学校と言うのは組織でありますけれど、やはりチームだと私は常々思っております。チーム一丸となって、チーム戦で、向かっていくという中で、そこで培われるいろいろなものがあるんだろうなと思っておりますので、学校現場は、非常に容易でないと思います。思いますけれど、それをこらえながら、そういうものなんだというところも踏まえて、しっかりと取り組みを進めてもらいたいと思ひまして、私もそのためにはしっかりとサポートしていきたいというふうに思っています。

現在、村上市におきましても90名の方が避難をされ続けているわけでありまして、これは

まだ終息には至っていないという現実だと思います。ですから、我々はその中で、新たな生活の基盤を見つけて皆様方としっかりと向き合っていくということが必要なんだろうというふうに思っています。

村上市も、各学校の学力について公表させていただいたわけでありまして、学校ごとではないんですけれど、その中で、県平均、全国平均と比較すること、これも確かに大切な指標であると思うんですけれども、やはり、今定例会において教育長の方から答弁をさせていただきましたとおり、個別の各学校ごとの課題もあるし、効果の上がっているところもあるわけでありまして。それを一緒にまとめてしまって村上市の学力は、というところに捉えるのは、私はいかがなものかなと個人的には思っているんですけれども、これも一つの指標であることには変わりありません。先ほどのチーム戦と同様に、村上市のそういったものが数字で表されるものなのであれば、そこが向上していく、これが多分そこに当事者としている子供たちの成功体験に繋げる一番大きな要因にもなるんじゃないかなと思っています。やれることは限られているとは思いますが、その中で一つ一つ、今の時間を過ごしている子供たちが、しっかりと成功体験を積み上げていくことができるような、そういう教育行政でありたいと言うふうに思っておりますので、限られた時間ではありますけれど、皆さん方から大いにご発言をいただければと思っております。

今日は本当にありがとうございます。

【教育長あいさつ】

遠藤教育長：皆様こんにちは。今ほど市長からお話のあったように、県内では、他市町村で中高校生の自ら命を絶つ事案、それから教員の不適切、人権面での配慮に著しく欠けた発言、そのようなことで、今日もニュースになっておりました。一度起こってしまったことは、取り返しのつかない事案だということを痛切しております。市長からも指示がありましたので、早々に各学校に冬季休業前ということもありまして、通知を出させてもらいました。校長会もありますので、追って指導を重ねたいと思います。その中では、本当に他市町村の事案では無く、本市においても、どこの学校でも起こりうる事案なんだと、緊張感、危機感を持って対処するようと言うことを強く指導していきたいと思っております。

今まで、この総合教育会議では、前回、前々回と、どちらかというと学力向上面を話題にさせていただいておりました。今日は、特に調整事項の中で、「不登校について」「コミュニティ・スクールについて」という話題を取り上げさせてもらっておりますけれども、学力向上とは表裏一体の関係にあるものです。子供たちが、安心して学べる環境、安心して学校生活を送れる環境、これこそが何よりも大切です。それがあつての学力向上だと思います。そういう面で議会でも不登校の件数が多い、発生割合が多いということを答弁させてもらったのですが、その現状を、今日は指導主事から説明させていただきます。それとあわせて、学力向上面、不登校の解消、それから地域との連携、様々な問題において、これまで以上に地域と連携した取り組みを推進しなければ、もはや学校だけでは解決できないような事柄が沢山ありますので、コミュニティ・スクール制度ということを取り上げさせていただきました。

つい先日の新聞でも、三条市、それから少しばかり制度が違いますが、田上町でもこの学

校運営協議会を設置するコミュニティ・スクールを次年度から取り組むということが報道されておりました。これも指導主事の方から簡単に説明させていただきますので、あわせて皆様方からご意見を頂戴したいと思います。そして、生涯学習課からは、たくさん事案を抱えているんですが、今回は「山元遺跡の活用」ということで、田嶋課長から説明させていただきます。これについても皆様方のご意見を頂戴したいと思います。

本日は、どうぞよろしくお願いいたします。

【報告】

高橋市長：もう一つ、あいさつの中で言い忘れました。

先日、村上市の学校職員の中で、不祥事がありまして、それについては処分をさせていただいたわけでありまして、これは、皆様方はもとより、市民の皆様にも多大なご心配をお掛けしたんだろうなと思っていますし、何よりも当事者であります、当該校の保護者、子供たちの皆さんは他人事で無いわけでありまして、非常に不安も感じられたでしょうし、本当にご心配をお掛けしたなということで、冒頭に申し上げようと思ったのですが、申し訳ありませんでした。

いずれにしましても、あつてはならないこと、これは誰しもがそう思うわけでありましてけれども、それが現実には起きたということ、これの目を回復するためにですね、しっかりと取り組みをしていかなければなりません。何よりも子供たちが一番不安がらないように対応していただきたいと思っておりますので、その点について付け加えさせていただきます。

申し訳ありませんでした。

①「パブリックコメントの結果について」

村上市教育大綱（案）に関するものについて、総務課山田参事が、資料1に添って報告。

高橋市長：意見の提出は無かったということで、まずもって、それを謙虚に受け止めながら、しっかりと教育大綱をブラッシュアップしていきたいというふうに思っています。

皆様方からご発言があったらお願いします。 ————— 発言無し。

村上市教育基本計画（案）に関するものについて、学校教育課遠山課長が、参考資料に添って報告。

高橋市長：それでは、これについて皆様方からご発言をいただければありがたいのですが。

高橋市長：1と2について、実際に、現在は使っていないのですか。

遠山課長：一部の学校では、総合学習とか、そういったところで使っています。

遠藤教育長：みんな配布されていますね。

高橋市長：一部の学校というのは、ゆかりのある学校と言うことですか。

遠山課長：その辺もありますし、詳細についての調査はしておりません。聞き取りによるものです。

高橋市長：調査をしてみてもいいのかも。他の自治体を見ると、やはりゆかりの人たちというのは、結構います。まあ、学校の授業の中で云々カンヌンと言うことに留まらず、いろんな場面でやればいいかな。あとは、村上に来ていくつかのアイデンティティというか、よりどころみたいなのがいくつもあって、今5市町村で合併しているそれぞれがあると思うんだけど、それをコーディネートしてしっかりと皆のものにしていかなければならないのではないかなと、つくづく思っているのです。

例えば、村上小学校の子とか、南小学校の子とかは、三面川の鮭なんていうのは良くわかる。それがあたかも生まれてからずっと、そのまま一緒に育ってきているようなところもあるけれど。他の地域では、そういう感覚にはまだなっていないというのが現実なんだろう。でも、村上はそういうものなんだよと言うことを、一つそれを見つけ出すとか。それは山北にも荒川にも朝日にも神林にも、それぞれある。そういうふうな一体感の醸成を含めて取り組むということ。学校教育の現場だけでなく、いろんな形で取り組むのが必要なので、この1と2のご発言というのは、非常に、なるほどなというふうに受け止めた。皆さんはいかがですか。

遠藤教育長：青砥武平治なんかについては、村上小学校、南小学校だけでは無く、生誕300年祭もあったので、多くの学校で話題にして、マンガも全児童に配布しましたので、非常に興味を持って取り組んでいたと思います。だから、市長が言われるように、共通に話題にしていく人物もあるし、地方の、ローカルの中のローカル的な人もいるかもしれないけど、やはり、より多く取り上げるのが大事なことだと思います。

高橋市長：そんなところも踏まえて、教育委員会で、文言修正、回答の部分、よろしいでしょうか。お願いします。

次に、岩船中学校の統廃合の問題は、裏にどのようなデータの分析があるよ、ということまでは出していないわけなので、学校教育課として意図するところはわかりますか。

遠山学校教育課長：この方につきましては、PTAの役員の方で、以前も、パブコメの前に個人的な問い合わせ等があった方です。

高橋市長：率直に、どういうふうに分析していますか。なるほど、これも将来的にはあるのかな。そうはならないよとか。

遠藤教育長：将来的には話題にしなければいけない大事な岩船中学校の話題だと思います。平成35年くらいから大幅に生徒が減るんですね。ただ、岩船中学校の将来を考えているという

この方のパブコメが、岩船地区又は岩船中学校の総意になっているかと言うと、そこはまだ確認できておりませんので、安易に取り上げることは難しいかなと思っております。

でも、いずれにせよある時期に来たら、やはり市教育委員会の責任で話題にしなければいけない時期が来るかと思えます。

高橋市長：平成 35 年が劇的に減るのか。

遠藤教育長：1 年生が 12 人、2 年生が 20 人とか。そういう状況です。

高橋市長：その後の様子ってわかりますか。

遠藤教育長：その後も大きく増えることはありません。その程度で推移します。ただ、今は、平林中と神納中の統合を、まず先に推進しているわけですがけれども、そこに大きな影響が出ると、また困る面もありますので。

村上第一中学校と統合になると距離があるんです。岩船中学校と村上第一中学校では、6 km 以上ありますので。だから、この方は神納中学校と一緒に統合させてくれないかと言うご意見なんです。すると、3 km 程度で、これまでの組合立岩船中学校の時代もありましたので、特に、西神納小学校区の方とは関係が強いということも、良くわかっています。

だけれども、一応、望ましい教育環境整備検討委員会の計画の中では、旧市町村を越えた統合は、原則としてはしないとうたっていることもありますので、とりあえず、今回の中学校の統合には、一緒にしないということを教育委員会としては確認しております。

高橋市長：今、小中学校あわせて 28 校でしたか。将来的にはどうなるのですか。

遠藤教育長：中学校の方は、一応、旧村上市内は 2 校、あとは原則 1 校、計 6 校。小学校は半分くらいになるのではないかなと思います。

高橋市長：そうすると、今の学区そのもののイメージって、劇的に変化させなければならないよね。望むと望まざるにかかわらず。

現実問題、第一中学校と東中学校を旧村上市内に残して岩船中学校と統合していくというのか、岩船中学校が神納中学校に行くというのがあるかもしれないけれども。それ以外に小学校区といえば非常に大変ですよ。面積は変わらない、住んでいる集落も変わらないので。そうすると、その学校にアプローチさせるというのは非常に難儀ですよ。難儀なんて言うてはいられないんだけど、そうすればおのずと、全部バスにならざるを得ないんだよね。

遠藤教育長：小学校でだいぶ人数が減っているのに、話題になっていない学校は、金屋小学校と朝日みどり小学校なんです。1 学年 20 人切っている学年もいくつかある中で、計画には今のところ取り上げておりません。中学校はやはり岩船中学校です。

高橋市長：対処療法的なやり方でなく、抜本的な都市形成として考えたときに、こういうふうな学校の配置のあり方だよね、ということ、しっかりと議論をしなければならないのかもしれない。住ましている人の思いは一杯あるのだろうけど、それが非常に大きなハードルになっている。

次に、4番、5番はどうでしょうか。教育基本計画には直接関わり無いことにはなりますが。先生方は、生徒に善悪の価値判断を指導していただきたいなんていうのが、文字になって出てくること自体が。

勝間委員：どういう背景で、このコメントが出てきたのか。いかようにも取れるような幅も広い。なんか、指摘としては。

高橋市長：概念論としてはわかるんだけど。具体の背景があったりすると非常に悩ましいことなんだろうし。

遠藤教育長：道徳は、再来年、教科化するんですよね。道徳が教科化になると評価が伴うんですよ。ある生徒はどういう考えをしたのか、それを教員は評価していかないとダメなんです。数値化はしないんですけど狙う価値観と相違うような考え。

高橋市長：その価値観そのものが正義だというふうにして説明をしなければならない。それは正義だという根拠はどこにあるのか。それぞれ個別に価値観が違って、幅があって、同じ道徳の中でも幅のある道徳だよね。

遠藤教育長：教材によっては、正義と約束を守るとか、そこで子供は葛藤するわけですね。こういう行為に賛成できるのか、こっちの主人公に賛成するのかとか。そういう中で自分に立ち返って、自分ならどうすると。

高橋市長：今、メディアで氾濫している評論家とかコメンテーターの解釈って、賛成と反対で、確実に一つの事象に対して分かれてますよね。それを常に見ている子供たちにしてみれば、どっちの判断もありだよね、みたいな。その中で本質を見極めていく、それをするために学校があるんだよね。そういう人間を育てるために。

佐藤委員：多様な考え方を持てるというようなことも言われていることですね。それを求めているわけですね。一つだけでなく、いろいろな考え方ができる子供たち、大人もそうですけど、そう言いながらも評価となりますが。

勝間委員：評価が入ってくると、教員の年齢構成もあるし、力量もありますね。

高橋市長：我々の年代と若い人の年代の価値観だとか、この時点で違うよね。教員の年齢によっても違うよね。

遠藤教育長：道徳の評価については、これから大きな教員の研修事項になります。来年、教科書が選定されるんです。そして、その次の年から小学校では使い始めますので、教科化されるということはそういうことなんですね。教科書があつて評価が伴う。

高橋市長：それでは、4と5についても教育員会で揉んでください。続きまして、協議事項の村上市教育大綱（案）についてお諮りをいたします。

【協 議】

①「村上市教育大綱（案）について」

高橋市長：前回ご提示申し上げて、その後、パブコメで特段ご意見も頂かなかつたということです。第2次総合計画を踏まえた形の大綱ということで、本筋につきましてはOKだということだと思いますけれども、あらためて皆様方からのご発言を求めます。

高橋市長：ご発言が無いようですのでお諮りをさせていただきます。村上市教育大綱（案）につきまして、本日お示しをいたしました内容でご承認をいただけますでしょうか。

_____ 承認 _____

【調整事項】

①学校教育課 坂爪指導主事から「不登校児童生徒の現状について」説明

高橋市長：不登校についての説明について、感想でもご意見でも結構でございます。何かありましたら。

高橋市長：さっき、全ての事案に対応しきれてないという状況ということだが。児童相談員も含めて。そうすると、現実問題、漏れ落ちているということだよな。

坂爪指導主事：全ての事案を事例検討会に出せないという意味です。

高橋市長：個別には対応しているんだね。

坂爪指導主事：そうです。全て把握しています。

高橋市長：それともう1点。全学校を対象にして、不登校の児童生徒は、小学校は20校で20人、中学校は8校で50人という話だよな。学校での傾向というのはありますか。なぜかというところ、全体数が小さいところで1人いるのと、いっぱいいるところの1人っていうのは、本人も含めて対応がずいぶんと違うんだらうなと考えます。

例えば、何人もいないところで1人不登校になれば、皆がわかるわけですね。そういうふ

うな外圧みたいなの大きさって、大きな学校と小さな学校では違うんだらうなと率直に思うんだけど。その辺って傾向みたいなのがありますか。

坂爪指導主事：中学校は、全部の学校に1人以上の不登校の生徒はいます。ただ、2～3人というところもあれば、2ケタと言うところもあります。どちらかと言えば、大規模校の方が多く発生しております。小学校の方では、0人という学校もあります。でも、3～4人という学校もあります。周辺部は、やはり少ないかなという感じは致します。

高橋市長：先生から見て、不登校児童のいない学校という学校、キャパシティの違いはあるのかもしれないけど、ここが違うなというのがありますか。

坂爪指導主事：さっき申し上げたように、家庭の状況がちょっと違うかなという気がします。

高橋市長：そうすると、養育環境の問題というところ。それはどこの学校にも起こりうる。そうすると、学校の大小で傾向はでるわけでない。中学校は、比較的大規模校の方が多くなるということですか。

坂爪指導主事：やっぱり、人数の多さもあるかもしれません。

高橋市長：あと、発達障害って病気ではないのですか。

坂爪指導主事：病気です。診断を受ければ。

高橋市長：そうすれば、この不登校には該当しないということなんだろうか。

遠藤教育長：さっき、指導主事が言った中には、兄弟姉妹が不登校という事例もあるんですね。そういう兄弟姉妹が多いと、その学校は不登校の発生率が高くなります。

それから、私も一番懸念しているのは、義務教育の中で考えれば、中学校3年生の不登校の子が卒業すれば、その分、20人とか減るはずなんです。でも、減るところか、次の年、多くなっているということは、小学校で新たな不登校が発生しているということなんですね。そこがまず、異常に深刻です。

それから、欠席30日で線を引いて、統計処理してるんですけど、30日に満たなくても20日とか10日とか、そうやって小学校で休んでいる子が、例えば、中学校へ行くと発生してしまうとか、病気とか他の理由で、含まれてないんですけども30日より多く休んでいる子もいるわけですね。そういう子が結果的に不登校になるとか、そういう発生要因があることも気になるところです。

高橋市長：ある意味、方法論としては、養育環境の整備をキチンとする。周りのフォローアップをしっかりとっていくという部分ということで効果が出れば、比較的、そこが問題の要因と

しては本質的な部分だよねという一つの検証もできるわけだよね。

坂爪指導主事：データの的には、全く裏付けが無いんですけれども、指導主事の中で、他の市町村を経験して、村上市に来た職員もいるんですが、何となくなんですけれども、村上市では非常に子供たちが大事にされていて、困難に打ち勝つような強さが、若干足りないのではないかと。

それも、狭いと言いますか、考え方がこれしかないというような、友達に何か言われたからもうダメ、ほかの友達もいるわけなんですけれども、そういうような傾向があるんじゃないかというような話もしています。全く裏付けはありません。

高橋市長：裏付けが無くても、そのこのところ。そもそも、学校教育の現場って、そういうところでもしっかりとした意志を持てるように教育しているわけだから。

例えば、率直にそういう感想があるというのであれば、そこを改善しようとやればいいんだよね。これが正解だなんて、多分無い、この部分は。だから、いろんなことを模索しながら、もがきながらやるしかないんじゃないかなと思いますけれど。

良いことを聞きました。

佐藤委員：もう一つは、学校で2日間なり3日間欠席すると何があるのかということで、家庭訪問を先生がされるという話を、さっきしましたよね。そういうようなところで、訪問した場合においては、先生方は時間内にするんでしょうけれども、その間、先生は外に出るわけですので、この学校間の他の先生方との連携とか、そういう関わりですね。誰がどのようにフォローしていくのかというような体制づくりが、その辺が無くなっているのかなということ。

あとは、子供たちが例えば30日以上、ここに数値として載っているわけですよ。例えば20日以上、あるいは10日くらい休んでいる子供が、もし、先生方のそういうような努力の結果、学校へ登校するとなった場合において、学習面で落ちますよね。解らないわけですよ。そうすると、子供は学校へせっかく行ったのに解らないとか、友達との人間関係とか、前とは変わってくるんじゃないかと思うので。その辺の子供たちのフォローはどんなふうな体制になってくるのかということ。

この2つの現場での状況を教えていただけたら。

坂爪指導主事：学校の体制の方ですが、家庭訪問も、中学校の方ですと空き時間がありますので、空き時間に行く先生もいます。また、授業を入れ替えて、空き時間を作ってもらって行く先生もいます。小学校は、それがなかなかできませんので、放課後になりますし、また、お家の人と会うということになりますと、やはり、5時以降、6時とか7時とかになる場合もあります。その辺は、先生方の努力に委ねている部分はあると思います。中学校だと部活なんかを他の人が見るからということで、放課後行ってなんて時もありますけれども、それが全てうまくいくということではなくて、なかなか体制が。

佐藤委員：中学校の場合においては、空いている時間に先生方が家庭訪問するというところでしようけれども、小学校の場合においては、本当に時間内では非常に難しく、一人の先生にみんな負担がかかってくるような感じを受けますので、その辺のところの学校内の、誰がどのようにそれをカバーしていくのか、というようなところの体制をしっかりとしておかないと、先生もまいてしまうのではないかな、なんて気がしますので、その場合においてフォローしてあげると、担任の先生も落ち着いた気持ちでっていうか、先生自身の心の余裕みたいなのがあれば、関わりも広がっていくような気がするんですけど、その辺のところはできてますよね。

坂爪指導主事：大変ありがとうございます。お話のとおりでありまして、例えば、子供たちによって、担任以外でも話せる先生がいます。養護の先生とか部活の先生とかいますので。

じゃあ、誰が話ができるのかというのを、特に中学校は探っていきますね。そうすると、担任以外でも、担任より養教の先生が行った方がいいだろうとなれば、担任が行ったり養教が行ったりすることもあります。それから、保護者対応については、家庭訪問しても家ではなかなかお話ができませんということになれば、学校に来てもらって管理職とか学年主任、学級担任が入る場合もありますけれども、ほかの職員が同席してケース会議みたいなものを開いたり、保護者面談したり、そういうこともあります。

本当におっしゃるとおりで、学級担任1人に負わせないということが非常に大事だと思います。学力について、補習的なものはやはり必要です。そうしますと、放課後ですとか、休んでる時も、できたらプリントでもやってもらうということで、家庭訪問の際に渡したりすることもあります。

遠藤教育長：あと、教室に入れない子、来たけれども入れないという子への対応は。

坂爪指導主事：校内の適応指導教室という特別な部屋を用意して、空いている先生が見るということもありますし、保健室で学習をするというような場合もあります。

勝間委員：私も現場にいた頃を思い出しながら話を聞いてました。本当に、この村上市、結構、人的体制にしても、丁寧に手厚くやっているとします。

市長さんが挨拶の中でチームという言葉に触れましたけれども、やはり、これもチームを学校全体として、校長、教頭、教務主任、いわゆる管理的な人じゃなくて、教育のプロの教員指導、先輩として学級担任を育てるためのアドバイスというかフォロー、それと、年相応の保護者の親、あるいはおじいちゃんおばあちゃんへの人間同士の付き合いはどうしてもあります。

仮に担任が若ければ、目の前の大多数の子供の授業に全力を投球するのが建前です。そして、その後、保護者に対応するのも、意欲を減らすことになる、先輩教員の、管理職であり、大きな学校だと学年主任だとかで、フォローして、ある家庭は対応してもらおうとか、適材適所のチーム、ホームランは打てないけれども、作戦は巧みだとか。そういうふうなことを、上手にリーダーシップを取る校長だったり教頭が大事だなと思っているし、また、学

校によっては、いろいろうまくいってるなど。

ずーっと全欠だった子が、玄関まで来てそこで担任が温かく迎える、あるいは、校長あたりが「お母さん送ってくれてありがとう。」とか、そういう小さなことを積み重ねていって、保健室に入った、教室へ行った。それも無理しないで給食まで頑張ったね、ということで、校内のチームプラス学校と保護者なりの信頼関係を醸成する。その1人のプレイヤー、担任に任せただけでは、先生が潰れるだけでなく、幅広い教育効果の面でも難しいかなというのが、こういう話は、結論がズバツと言えないのですけれども、そんなことを感じました。

佐藤委員：今のところで、いろいろ聞こえてくる話の中で、担任1人ではできないところで、全体でも関わっていかないと。

保護者の人たちは、学校に1回でも関われば、全員が受け止めてくれるというか、分かってて対応してくれると思って行くけれども、学校ではそこまで共有されていないというところで、保護者の人たちがそこに来て知らん顔という感じで、分らないという感じで流されるという場面も聞くことがありますので、そういうような一丸となってやって、同じように取り組んでいかなければならないのかなって。その辺の細かいところまで気を使っていかないと、やっぱり保護者の人たちは、何もしてくれないという態度に変わってくるのではないかなと。

高橋市長：結果的に学校で何もしていないわけでは無いんだけど、切羽詰ってきている人のモチベーションと、学校では情報は共有しているんだけど、そのテンションと同じテンションでないということもあるんだかもしれない。それがやっぱり、今してくれと思っている人からしてみれば、何も聞いてくれない、何も情報も共有してくれないんだとなるかもしれない。

でも、それは現実としてそうなってしまうわけだから、そうならない仕組みをこっちの方で作っておく。今、勝間委員が言ったような、チーム戦みたいな部分で、ある程度、どのくらいで、佐藤委員がおっしゃるようなことをフォローするためにはどのくらいの情報をお互いに共有していくのか、というようなことも必要なかもしれない。あと、小学校の場合、放課後でないといけないと言ったのは、そこが、実際容易でないと思う。何らかの方策を講ずるような形でないと、たまたま同じ条件でなくなるわけだ。

先生は、1人不登校を抱えることによって、別なメニュー、それもかなり悩ましいものを抱えてしまうわけだから、それを踏まえて、同じクラス経営をやってくれというのも、なかなか。そんなもの、どんと来いと言ってもらいたいのはやまやまだけど、それだって、さっき坂爪先生が努力にかかっているとったけども、努力に委ねるということではなく、ある程度、ハードウェアとして整備したうえでやっていって、そこには温かさとか優しさとかを加味してもらってやるということの方が、より効果的なんじゃないかなって思うので。

財政的な話もありますので、どこまでそれが可能なのかどうか。以前、各学校にカウンセラーを配置みたいな話をしたことがありますけれども、ある意味、そういうふうな頭数的な人の手を入れることによって、そういう専門的分野を入れることによってフォローできることがあって、可能性として考えていってもいいのではないかなって思います。

遠藤教育長：国の方でも、チーム学校という言葉を使い始めているんですけども、教員が全てを抱えるのではなく、教員が学力強化の指導に、より専念させようと。生徒指導的な対応、不登校の対応、こういうのを専門にフォローできるような専門家を各学校に配置したいというような構想を持っているんですね。

ただ、実際配置してくれるのかどうか、そういう専門家がいるのかどうか、それは甚だ疑問ですので。新発田市は、スクールソーシャルワーカーを。これは福祉の面との関係、関連もとることができる。単にカウンセリングをできるだけじゃなく、家庭に入って、いろんなところと繋いでいくような、そういうノウハウを持った人を雇っているんです。

下越では、下越教育事務所に1人いるんですが、村上もその方に来てもらってお世話してもらっております。教育委員会としてできることとなると、市で1人、そのような優れた人がいれば雇うということができるとかなと。その方が多くの学校と関わっていけば負担軽減に繋げていけるのではと。

高橋市長：村上中等教育学校で、カウンセラー（専門職）を入れたときって、結果的に効果が出たよね。子供に対してもそうなんだけど、教員に対してのカウンセリングもやるんだよね。あれが、PTAの経費で導入するって言って、次年度以降は県で措置してくれって言って、県内の中等の全校で連携して陳情に行って実現したんですけど、あれって成功事例だと思うんですよ。だから、確実に効果は上がると思う。だから、教育長が遠慮しながら市で1人という話だったけれど、本来は学校に1人配置すべきでないかなと思います。その辺も含めて、トータルで考えたときに、結果的にそれが良ければ、非常にいい投資効果だと思うんで、いずれにしても、我々は次の世代に、しっかりと作り上げていくという仕組みはしっかりと見据えていく。今ある体制と、そここのところをどういうふうに整理整頓していくか。介助員、支援員という形で、今、勝間委員が言ったとおり、相当なボリュームで入っているわけなんです、それとの棲み分けとか、というものもしっかりと見極めて、結果が伴わないと。やった方がいいが、なかなかその改善策が見えない。これは、何ヶ月とか1年とかで出るものではないかもしれないけれど、少なからず、そういうものを改善していくという方向を見つけ出していかなければならない。

本図委員：自分の子供の頃を思い出すと、小学校、中学校、どんなに先生に怒られても、親に怒られても、友達と喧嘩しても不登校になるような子供はいなかったっていう記憶なんです。けれども、今、不登校の子供が増えているということは、世の中、何かが変わっているんだろうなって感じます。それが、親世代の考え方が変わったのか、教育現場で何かが変わったのか。

例えば、今の教員の中にはゆとり世代と言われるそういう世代の先生もいるだろうし、昔と今と何が違うのか。そういうのを少し分析して、今不登校になっている子供はスクールカウンセラーを入れる。そういうので対応をしていけばいいんですけども、これ以上増やさないために、昔は不登校がいなかったんだから、何かどこかで変わっているんで、細かく分析する必要があるんじゃないかなって感じます。

高橋市長：究極の命題ですね。みんながそれで悩んでいる。

佐藤委員：今日の日報を持ってきたんですけど、子供は社会を映す鏡とあるんです。減らぬ一面ということが出ていたんです。この部分のどこなんだけど、結局、今の社会を映す現状は、子供を見れば、今の社会が見えてくる。何となく、本図委員の話とちょっと似ているなと思っているんですけども、そんなことで、いろいろな角度から、こういうような一面もそうですけど、不登校の場合はこれがなんてものは無いわけですので、やはり、大人とか、生涯学習の部分においても、大きく関わる部分じゃないかなと思っています。

高橋市長：良くわかります。昔は無かったというのも良くわかります。でも、今は現実問題としてあるので、それに向き合わなければならない。それに対する対処をしなければならないし、今後、将来にわたってそれが減っていく、若しくはゼロになるという仕組み。そういう社会づくりというのもしていかなければならない。そのための知恵作りだと思うので、こういう議論も含めて、いろんところで発言をしてもらいたいし、あとは、具体的な施策としてキチンと現して。

教育委員会に委ねることは一杯あると思うので、その辺のところも、取り組みを進めてもらうとありがたいなと思っています。いずれにしても、一番ダメージを受けているのは子供。不登校になって、多分、いいことはあまりないんだと思う、これから社会を生きていくうえに於いて。年もとっていくわけだし。そういうのであれば、一刻も早く改善してやる、解消してやる方策、ここを研究する必要があるかなと思いますので、ぜひお力添えをいただきたいと思います。

遠藤教育長：佐藤委員さんが良く言われるんですけど、自己肯定感とか自己有用感とか。その子が学校、クラス、地域、家庭で本当に役立っているんだと、そういう成功経験を沢山与えてやって認めてやる。そういう場を数多く、学校授業が中心ですので、共同的、対話的な学びというのを重視していますので、多くの中で切磋琢磨しながら認められる。どの子も大事にされるということ、学校はいろんなことで大事にしていかなければならないんだと思います。

②学校教育課 坂爪指導主事から「コミュニティ・スクールについて」説明

本図委員：質問ですけれど、このコミュニティ・スクールの会議は、どんな時に招集されるのでしょうか。

坂爪指導主事：既に導入しているところによって様々ではありますが、私が聞いた事例では、年度当初に先ほど言った学校運営方針について承認を得る機会、4月ですとか5月。その後、3～4回やって、年度末にもう1回ということで、5回とか、その程度の集まりがあるという話を聞いたことがあります。

高橋市長：相当な責任の度合いですね。

遠藤教育長：今、学校評議員制度はあるんですけど、4名ですか、各学校に。それは、年度当初、それから進捗状況なので10月、11月頃に1回、そして、年度末に1回、3回集まって、それに予算が付いています。学校評議員制度というのは、あくまでも学校評議員が個々に校長に対して学校運営について意見を述べることができる。

ところが、このコミュニティ・スクール（学校運営協議会）というのは、校長の学校運営の基本方針の承認なので、その協議会がダメだということのかわかりませんが、合議で熟議の中で、あれこれ出して、もっとこうの方がいいんじゃないかと、皆で決定していくことになるんです。これが決定的な違いだと思います。だから、今、市長が言われたように大いに責任はあるんです。でも、結局、最後は、もちろん校長が全責任を負います。

高橋市長：そうすると、あまり変わりがないんだけど。

やっぱり、その覚悟で臨む姿勢が必要なんだろうと思うので、相当、この人選も含めて、非常にデリケートだなというふうに思って、でも必要なことだと思う。少なからず、今までの学校運営そのものにPTAとかそういうのも含めてやってきたのが、これと全く違うかというようにそうでなくて、その中にいる方を含めて、皆で考えていくということ。それを、より明確な形で制度化していくっていうこと。当事者意識をしっかりとここに現していくという意味では非常にいいことではないかなと。

あと、モデル校でやっていくのはOKなんだけれども、例えば、これの時って小中学校連携したコミュニティ・スクールなんていうのはあるんですか。

坂爪指導主事：あります。これもいろんなパターンがあります。小中別のもありますし、ひとつのもあります。

高橋市長：9年間でしっかりした教育をやろうね、という仕組みもありだということ。

遠藤教育長：上越市、三条市もそうだと思うんですが、小中一貫校とコミュニティ・スクールの制度は、一体化したものだという考え方ですね。

高橋市長：あそこは、既にあるからね。それだけでなく、我が村上市の子供たちって、必ず義務教育、今の過程の中で行くわけだ。その中でトータルで、人づくり、子供作りをしていくんだよってというのは、どこの学校にいても同じ考え方なんだろうと思うので、そんなもののノウハウはしっかりと、今の子供たち、これからの子供たちに反映させるような仕組みだと一番いいんだけど。

坂爪指導主事：なお、県内の様子、状況ですけども、ちょっとお話するのを忘れてました。

現在では、7市町村、聖籠町、上越市、見附市、湯沢町、刈羽村、妙高市、糸魚川市でや

っております。来年、再来年に取り組もうというのが、関川村もそんなお話を聞いておりますし、胎内市も聞いております。

佐藤委員：このコミュニティ・スクールが開かれるようになると、評議員会はそのまま残るんですか。変わるんですか。

坂爪指導主事：それも、いろんなパターンがあるようなんですけど、会議の数はあまり増やさない方がいいのかなと思うので、減らしてもいいのかなと思うんですが。

遠藤教育長：学校評議員制度は、法律で設置しなさいと決まっているから、無くすわけにはいかないんだと、私は思います。

坂爪指導主事：兼ねることができるかどうか、検討します。

遠藤教育長：今後、新たな教育基本計画の中で、5年間かけて、できれば5年後までに、全校に設置したいと考えるものです。

③生涯学習課 田嶋課長から「山元遺跡について」説明

遠藤教育長：現段階では、埋め戻されて、上に登っても何もわからないんですね。

高橋市長：日常的にはそこを訪れることができる仕組みにしていくという最後のまとめだったんだけど、そういうイメージを生涯学習課では持っているということですか。

田嶋課長：そういうことです。最初に言ったように、お城山のように市民の方が気楽に散策したりするような、親しめる場所にしたいと。

高橋市長：城跡2つの国指定から、また、新たに時代がはるかに遡った形でもう一つ出て、これもひとつの大いなる宝物なんで、これは、やっぱり史実的にも非常に価値の大きいものではないかなと、前にこれが発表になった時、見ていて思いました。まさに、ここに良いまとめ方をしてもらっている。

北と西からの中間点。いろんな意味で、ここ村上って、北の文化と西からの文化の接合点というか、ちょうど境目のような感じで、そういう意味ではいろんな言い回し、キャッチフレーズができるなと思っている。

田嶋課長：そのとおりです。ですから、そこを何かキャッチコピーで訴えていく必要があるかなと。

遠藤教育長：当日、説明を聞いて、この航空写真で、山元遺跡から西の方を見た写真を見せてもらったら、広い新潟平野がここでストップされているんですね。だから、ここに魅力を感じたんじゃないかなと。

高橋市長：昔は、身を守らなければならなかったから、必ずこういうふうな格好に。非常にいい地勢だよ。良い場所だと思う。

大滝委員：なんか、ロマンを感じますね、弥生時代というかなり昔の遺跡なものですから。なので、なんか想像力をかきたてるようなものがそこにあったり、そういったようなキャラクターみたいなものとか、そんなものを作っていくと。

一時、青森の三内丸山遺跡でしたっけ。ああいうところなんかは、考古学ファンだけでなく、一般の人にも知られるような遺跡になっているわけで、そんなような一般の人に受けるようなものを考えていったらいいんじゃないかなと。

田嶋課長：サケリンではないですけど、弥生時代の何かですね。

高橋市長：今、特に日沿道なんかでいうと、朝日道の駅を中心として、東北とのゲートウェイ、こっち側からあっちを見た形になってるんだけど、東北から見ると、北陸関東甲信を見る仕組みになっていて、ある意味、商業的な産地としての北限の茶所みたいな言い回しとか、野菜とか動植物、全部含めて北側と西側のちょうど中間で、非常にいい素材が一杯あるという所だということ、食材関係の方からだと、農業生産者の方から良く聞くんですけど、そういう一つのコンセプトで、そういうふうな組み立てをしていくというのもいいですよ。

そこに古代のロマンを感じながら、一番最初にこれが出てきて。それこそ感じたのが淳足柵みたいな感じの。未だに、何が本当なんだというところがあって、そういうふうな部分も含めて、古代に対するロマンみたいな、過去に対するロマンみたいなのを刺激してあげるのは良いんでないでしょうか。そうすると多分、そういう意味合いからいうと、交流人口もターゲットにできていくし、むしろ、ヨーロッパとかアメリカとかオーストラリアの皆さんは、これが非常に大好きで、長期に滞在をして、この中で日本の文化に、伝統に触れることにも繋げられる。可能性としては大いにある。あとはどのくらいの作りこみをしていくかということ。

大滝委員：興味を持たせるには、謎というか、こういうことを分ってます、ということだけでなく、分からないことで、ちょっと想像力を。いや、そうじゃなくてこうだったんじゃないかとか、いろいろ、こう想像させるような謎、例えば七不思議みたいなものをちょっと用意すると、そこから想像力が広がるような気がしますので、そんなところも。

高橋市長：キーワードは謎。いずれにしても宝物なわけでありますので、そういうスタンスでこれに向き合うということで、またお願いしたいと思います。教育委員会の皆さんには、先頭になってお知恵をいただきたいと思います。

田嶋課長：そこで、今、村上歴史文化館、おしゃぎり会館の隣、若林邸の奥にございますが、こちらの方で、山元遺跡と弥生時代展ということで11月19日から来年の2月19日まで、約3ヶ月、特別展をやっております。

ここでは、先ほど話をしたガラスのネックレスとか、銅製の筒形とか、あるいは鉄器、こういった物のほかに、埋設された土器を復元したものを展示してございますので、あわせてご覧いただければと思っています。

【その他】

佐藤委員：最後に、一言なんですけど、前回の話の中で、地域の子供たちが村上の良さっていうか、そういうようなことを伝承していくという話がありましたので、その中で、今日の、日報の窓の欄のところで、上海府の郷土料理を広めていきたいという小学生（8歳）。その子が、新聞に投稿して郷土料理のことを載せていました。素晴らしいなと思って。やはり、親と子供たちが学校との関わり、地域とのかかわりというのが、着々と結果として残っているのかなと思ったりして、ありがたかったというか、うれしかったので一言。

遠藤教育長：県知事賞を取った子たちですね。

「次回の会議日程について」事務局から説明

山田参事：そうしましたら、本日の会議で、大綱の方をご承認いただきましたので、今年度、定例的に開催するのは、本日で最終と考えております。緊急の案件があれば、随時開催ということで皆様にはご足労願いますけれども、次年度につきましては、6月が議会ということもありますので、7月頃かなと考えおります。その時には、ご案内させていただきますので、よろしく申し上げます。

【閉会】

高橋市長：これで、第3回の村上市総合教育会議を終了させていただきます。ありがとうございました。